二岐手前の谷にも水田が開け、見事なヤマフジがあった

の滝は思いの外あっけなく眼前にあった。県道からおよそ六〇〇メートルほどの距離である。

高さ約一五メートルのこの滝を境に市野と上平が分かれる。滝の左側崖の中央よりやや高い窪みの所に不動明王が祀られているといわれたが、昼なお暗い渓谷に視認することはできなかった。出会ったのは音もなく竿を出す若い釣り人だった。聞くと、細い流れながらイワナやヤマメが混棲しているのだという。

上平から二岐へ向かうと四〇〇メートルほどの台地が出てくる。洪積世末期の河岸段丘で、旧道脇には貝の化石も出土する名勝屏風岩があった。谷奥はかなりの程度に水田が開かれている。二岐の地名は明神ケ岳北麓を源流とする支流がここで合流するからか、川の名も二岐川という。唐澤さんによれば、かなり上流まで遡行すればブナの樹林もあるとのことだったが、「この暑さでは長物出るな」の話に即、断念した。長物とはどうやらマムシをさしてのことらしい。

古代の息吹

仏沢を通り二岐ダムを過ぎて松坂に至ると、それまでのV字形の深い浸食地形と違って、ようやく谷底が広くなる。ここから佐賀瀬川までは、一度堆積された谷底が再び浸食され始めた地形で、階段状に水田が開拓されている。縄文式土器や石器が出土し、仏教文化導入時期を知らせる古刹(こさつ)があり、中世の山城もあるという複合遺跡の集積地で、新鶴村の古代の息吹はここから始まる。

上から辿っていくとまずは西麓の河谷壁に沿って、まるで区画整理をしたかのような正方形の敷地が水田に張り出しているのが見える。草むしているので判然としないが、唐澤さんによれば大日山一二坊の寺家跡という。その背後には山麓にかけて天文三年(一五三四)大日如来が遷座(せんざ)した大日山、坊数一二宇の寺山、坊舎跡、そして医王山常福院がある(現在は新屋敷)という一大聖域でもあった。

そして佐賀瀬川をはさんで対岸の館が沢には二六基もの竪穴住居跡がある。『広報にいつる』に連載されている「新鶴村の隠れた文化財」に、唐澤さんの文で紹介されているので、それを抜粋してみよう。

「一説には原始時代日本海方面の民族が盛んに新天地を求めて移住し、会津へは阿賀川を遡上して支流の宮川(鶴沼川)へ入り、更に支流の逆瀬川中流の丘陵地(佐賀瀬川部落の西約一K)館が沢に竪穴住居の村落を形成した。当時稲作の知らぬ祖先族は身に獣皮をまとい山野に鳥獣を追い、木の実や球根を採掘し河